

日本テレマン協会創立45周年特別公演
第183回定期演奏会
ベートーヴェン交響曲全曲&合唱幻想曲&荘厳ミサ曲 Vol. 5
クラシカル楽器による

ベルリンでの交響曲の初演が熱狂的な喝采を受けたという手紙をもらいました。
彼の地に送った楽譜には全体にメトロノーム表示をつけておいたのです。」
L . V . ベートーヴェン

2008年7月18日(金)7:30 p.m. いづみホール

MESSAGE

学生時代に同僚から「振ちゃんは関西に戻るの？あっそうか、関西でバロックって言ったらテレマンがあるもんね」と言われたことを今更ながら思い出します。当時からテレマンの「100人の第九」は学生の間でも伝説的な存在だったように思います。友人のそんな言葉のまま...というわけではありませんが、結局関西に戻ってテレマンとともに歩んだ20数年。正直に言えばバロックの時代考証的な知識は僕のほうがちょっとリードしていました。古楽自体がそういった知識とそこからうまれるシミュレーションによって構築されるものだと考えていた私でしたが、テレマンとの活動で知ったこと...いや思い知らされたことが一つ。それは「延原武春」という要素。この説明しがたい人物の中に精緻な考察と飽くなき挑戦、そして他人には決してまねの出来ない「融和した音楽性」がある...『100人の第九』は生まれるべくして生まれたんだなあ。この思いは今回のチクルスを聞きながら改めて確信しています。

さていよいよ「第九」。全ての交響曲を経て、新たな魅力を発見しつつある延原さんがどういった音楽に仕上げるのか...楽しみです。そして今回は合唱幻想曲で高田君がフォルテピアノを演奏するんですね。「名演」の少ないこの作品、フォルテピアノによる演奏は今回が本邦初であるとか。果たしてどうなるのか...彼の奮闘に心から期待しています。」

中野 振一郎

PROGRAM

L . V . ベートーヴェン Ludwig van Beethoven
(1770 - 1827)
= 使用楽譜：ブライトコプフ最新版 =
Breitkopf(Urtext)

合唱幻想曲 八短調 作品 80
Fantasy for Fortepiano, Chorus and Orchestra C-minor op. 80

ソプラノ：中村朋子・吉村千秋 アルト：渡邊由美子
テノール：畑 儀文・井場謙一 バス：篠部信宏
フォルテピアノ：高田泰治

交響曲 第9番 二短調 作品 125
Symphony No.9 in D minor Op. 125

第1楽章 Allegro ma non troppo, un poco maestoso
第2楽章 Molto vivace
第3楽章 Adagio molto e cantabile
第4楽章 Presto
第5楽章 Presto, Allegro assai

各メトロノーム記号は1817年にベートーヴェン自ら記入

ソプラノ：中村朋子 アルト：渡邊由美子
テノール：畑 儀文 バス：篠部信宏

指揮：延原武春
ヴァイオリン：姜 隆光(コンサートマスター)
合唱：テレマン室内合唱団
管弦楽：テレマン室内管弦楽団

MESSAGE

聴衆とともに、45年

日下部 吉彦（音楽評論家）

「理屈はいらんです。要は、これを聴いた人が、幸せな気分になれるかどうか、ということ」延原さんの、こんな声が聞こえてくるように思えます。クラシカル楽器がどうの、ピリオド楽器がどうの、楽譜の指定テンポがどうのということより、多くの聴衆が、どう感じとったかが大事。延原さんの、音楽に対する基本的な姿勢は、そこにあると私は思っています。

かといって、大衆に迎合するわけではありません。自分の信念については、人一倍頑固な面もある延原さんです。だれが何といおうと、譲れないことがあります。ただ、その基準は「学問」ではなくて、あくまで「音楽」そのもの。それを貫いてきた45年間でした。音楽大学を出たばかりの「若僧」が、同志を集めて「日本テレマン協会」を結成、独自の活動を始めたのが45年前のことでした。当時は、「楽界の異端児」などと呼ばれ、いまでいう「いじめ」のような目にも遭いました。それにも屈せず、毅然と「わが道」をゆき、延原武春の存在は、確固たるものになっています。もちろん、延原さんひとりの力ではありません。多くの先輩方の助言や、片腕ともなった仲間力があってこそその結果でしょう。そして、延原さんの決断の支えになったのは、やはり聴衆の表情でした。どんなに高級な音楽でも、聴衆の支持がなければ、何の意味もありません。

いま、日本のオーケストラの多くが、さまざまな苦難の道にさしかかっているとき、あらためて、聴衆の支持の大切さを痛感します。

今回の、ベートーヴェン・交響曲全曲シリーズは、まさに、これまでの集大成ともいえるべく、さらには、より高峰を目指す第一歩となるものと信じます。

PROGRAM NOTE

<第九>は交響曲か

ベートーヴェンの<第九>は交響曲ではない、と言ったらどれほどの反論が噴出するだろうか。たしかに声楽が入っている点で型破りだが、本人が交響曲と言っているのだから交響曲だろう、という声が聞こえる。名は体を表すというわけだ。だが実のところ、<第九>が交響曲でなくてはならない理由はない。東京ディズニーランドだって千葉県にあるではないか。当夜プログラムにのぼる<合唱幻想曲>も<第九>も、ベートーヴェンが「作曲家としての成功」をかけて世に問うた作品だ。そしてそれらの曲が「作曲家としての成功」を確保するための作品だとすると、<第九>は交響曲であってはならないのだ。

「作曲家としての成功」

18世紀に前半生を生き、19世紀に主に活躍したベートーヴェンにとって、「作曲家としての成功」とはどのようなものだったか。それは一にも二にも声楽曲で成功すること。そのことを端的に証言しているのが、同じ時代を生きた文学者E・T・Aホフマンだ。曰く「交響曲はハイドンとモーツァルトのおかげで器楽最高のジャンルとなった。いわば楽器による『オペラ』となったのだ」(1809年)とのこと。この言葉からわかるのは声楽の優位性。ホフマンは、器楽が以前より高い地位を得つつあること、その最高のものは交響曲であることを強調しているが、そのために引き合いに出しているのがオペラなのだ。「太陽のように明るい電球」と「太陽」のどちらが優位かはもはや検討する余地がない。「オペラのようにすばらしい交響曲」と「オペラ」の関係とて同様である。彼らと時代をともしたウィーンの人々は、程度の差こそあれ声楽の優位性を疑っていなかった。

ベートーヴェンの行動様式からもその事が分かる。交響曲の大家としては地歩を固める一方、オラトリオ<オリーブ山のキリスト>は鳴かず飛ばず、オペラ<レオノーレ>は大失敗、<ミサ曲八長調>は注文主に酷評される。ベートーヴェンは声楽曲が苦手なのだ。それにもかかわらず、生涯を通じて声楽曲の作曲をあきらめることはなかった。ベートーヴェンにとっての自己実現は声楽作曲家としての大成だったと言える。

<合唱幻想曲>

<フォルテピアノ、合唱と管弦楽のための幻想曲八短調>作品80は、ある演奏会の掉尾を飾るべく作曲された。その演奏会は<交響曲第5・6番>が初演された大規模な公演(1808年)で、その「大トリ」を飾ったのが<合唱幻想曲>というわけだ。2曲の交響曲にくらべ評価が芳しいとは言えない<合唱幻想曲>が、メインディッシュの座を射止めたのは、声楽曲だったから。そして同時に、作曲家自身が即興演奏を披露する自作自演曲だったから(初演時、楽曲冒頭のピアノ独奏はベートーヴェンの即興演奏だった。ちなみに演奏会前半の「トリ」も自作自演の<ピアノ協奏曲第4番>)。この演奏会のプログラムからは、大規模な声楽曲を頂点に、自作自演曲、交響曲と続く「ジャンルのヒエラルキー」が透けて見える。交響曲の大作2曲を下位のものとし、演奏会の終わりに最上のもので高らかに歌い上げられる声楽曲。この日のプログラムの組み立てはそのまま「最後の交響曲」の楽曲構造へとつながっていく。

<第九>

<交響曲第9番二短調>作品125の初演は1824年。このときほとんど聴力を失っていたベートーヴェンが舞台上上がり、実質

的にはそこにいるだけのお飾りに過ぎないにもかかわらず、あえて「指揮」をしたのはなぜか。声楽曲を作曲家自らが指揮するという、当時の「ジャンルのヒエラルキー」で最上のイベントを実現するためだ。＜第九＞は、第1～3の器楽楽章を第4楽章でことごとく否定し、それに代わる最高位のものとして声楽が立ち現れてくるという構造をとる。この視点から純器楽（交響曲）の部分を見れば、それは「劇中劇」の一種であることがわかる。シェイクスピア劇が始まったと思いきや、やがてそれは否定され、新たな演劇の理想が語られる現代劇。＜第九＞はそんな芝居と同様、自己言及的な構造を持っている。このような芝居をシェイクスピア劇と言うのが不適當であるように、＜第九＞を交響曲というのも不適當。＜第九＞は「声楽を内包する交響曲」なのではなく「交響曲を曲中曲として内包する声楽曲」なのだ。

＜合唱幻想曲＞と＜第九＞の関係

＜合唱幻想曲＞と＜第九＞の関係の力点は、器楽と声楽の楽曲形式上の融合とかメロディーの類似などにあるのではない。「ジャンルのヒエラルキー」の頂点に立つ「音楽の王」としての声楽を、両者が体現しているところにある。ベートーヴェンにとって不幸だったのは、この「音楽の王」2曲の初演が演奏の点で理想的とは言えなかったことだ。難曲の両曲だが、管弦楽にはアマチュアが参加し、練習は短期間しか行われなかった。結果は目に見えている。「音楽の王」は残念ながら裸だった。ベートーヴェンはまともな＜合唱幻想曲＞と＜第九＞を聴いたことがないのである（生前に＜合唱幻想曲＞の再演はなく、＜第九＞のときは聴力をほとんど失っていた）

「音楽の王」に謁見する

その点からしても当夜の演奏はとても興味深い。当時の楽器ないしそのレプリカを持ち、演奏法の研究に努め、時代背景を学習し「音楽の王」に臨む。それは当時、裸で人前に出なくてはならなかった「王様」に大礼服を着せ、冠を戴かせる作業と言ってもよい。当夜のフォルテピアノはそれに花を添えるだろう。

というのも、いづみホール所蔵の楽器は1820年代のオリジナル。ベートーヴェンと深いつながりを持つ、ナネット・シュトライヒャーの製造だ。もちろん完全な再現はありえない。しかし、そこはわれわれ聴き手が想像力を働かせればよい。19世紀前半の聴衆にとって「音楽の王」はどんな響きをしていたか。今夜は貴重な謁見の日となる。

澤谷夏樹・音楽評論

本日「合唱幻想曲」で使用するフォルテピアノは、いづみホールのご協賛によります。

『いづみホールのフォルテピアノは、世界的権威ウィーン国立博物館のアルフォンス・ヒューバー氏により、ベートーヴェンと同時代（1820年代）の製作家ナネット・シュトライヒャーの作ったオリジナルと判断されました。したがって、ベートーヴェンやシューベルトのピアノ曲の演奏には最適のものといえます。』

本文は、いづみホールHPより転載させて頂きました。

テレマン室内合唱団

ヴァイオリン / 井塚有子・岩崎光・勝本早織・川崎梓・嶋田絵美・中井ひさ・藤田瑞穂・松本温子・山住聖子

吉村千秋・渡辺有香

フルート / 泉由香・塩見典子・道井文女・廣野真紀・松崎恵理子・三好久美子・栗谷佳苗・山本有香子

クラリネット / 井場謙一・小川歩・後久義昭・田中伸一・中井英文・中塚昌昭・吉川敏弘・渡辺健児

バス / 宇賀弘・江嶋純吉・甲元真美・塩谷宗広・渋谷英明・杉山恭史・林康宏・松井義知

テレマン室内管弦楽団

1stヴァイオリン / 姜隆光・黒江郁子・中山裕一・上原香奈子 フルート / 森本英希・出口かよ子

浅井咲乃・近藤聡子

ピッコロ / 榎田雅祥

2ndヴァイオリン / 大谷史子・角田博之・近藤昌子・松本紗希 オーボエ / 松本剛・平山幸子

松原優子・原田潤一

クラリネット / 三戸久史・李胎蓮

ヴィオラ / 上野博孝・三谷彩佳・松井紀子・吉田哲章 ファゴット / 淡島宏枝・鈴木禎

今井良

コントラファゴット / 前田肇

チェロ / 上塚憲一・曾田 健・野田祐子・境 綾子 木管 / 木山明子・鈴木啓哉・堀温子

コントラバス / 橋本将紀・三好哲郎・長谷川順子

海塚威生

トランペット / 福中明・中島真

ツバ / 伊勢敏之・田中一也・三田博基

ティンパニ / 山下嘉範

パーカッション / 小西里奈・高木真穂・橋本浩汰

PROFILE

指揮 / 延原武春 TAKEHARU NOBUHARA

バロックからベートーヴェンまでの18世紀音楽を専門とする指揮者。1963年に早く、バロック音楽を啓蒙することを活動の大きな柱としてテレマン・アンサンブル（現・テレマン室内管弦楽団）を創設。彼らを率いて「大阪文化祭賞」をはじめ「文化庁芸術祭・優秀賞」（関西初）等

の数々の賞を受賞。なかでも1986年の「第17回サントリー音楽賞」(関西初)の受賞は大きな反響を呼んだ。テレマン室内管弦楽団やバロック楽器の団体「コレギウム・ムジクム・テレマン」そして自身が指導するテレマン室内合唱団とともに、教会の聖堂を舞台としてJ.S.バッハ「マタイ受難曲」あるいはマテゾン、テレマン、ヘンデル、カイザーが競作した「プロクセス受難曲」など本邦初演の18世紀のオラトリオや宗教曲を次々に公演。又、その活動は18世紀の作品を超え、W.A.モーツァルト「レクイエム」、F.J.ハイドン「天地創造」、「四季」、M.ハイドン「レクイエム」、ベートーヴェン「荘厳ミサ曲」、フォーレ「レクイエム」等へと拡張を続け、レパートリーの豊富さは他の追随を許していない。器楽曲のレパートリーは更に広く、J.E.ガーディナー、F.ブリュッヘンやC.ホグウッド、G.ボッセといった指揮者のほか、M.アンドレ、F.アーヨ、M.ラリー、J.ランパル、H.J.シェレンベルガー、P.ダム、A.ビルスマ、J.ヴァーレーズ、B.ジュランナー、G.カー、など各ジャンルの名手たちとの共演を重ねてきた。延原を語る上で特筆すべきは「第九」、「ウィーン古典派はバロックの視点から解釈するほうが、現代から遡ってみるよりもより自然なものになる」という発想から、1982年、延原はベートーヴェンの交響曲第9番を初演当時の編成で、しかも当時のメトロノームのテンポ指定に基づいて演奏。この新鮮な解釈は「世界初」であり、画期的な試みとして迎えられた。J.E.ガーディナーやC.ホグウッドら古楽系の指揮者が「100人の第九」の演奏テープを参考にするため自国に持ち帰っている。「100人の第九」と題された当公演は人気シリーズとして現在でもザ・シンフォニーホールにて公演継続中。2006年秋には「100人の第九」をCD化。更に11月にはクラシカル楽器による演奏団体「ピリオド・インストゥルメント・プレイヤーズ」(PIPP)を立ち上げ、初演当時の第九を公演。指揮者としての延原武春の活動は、国内はもとより、ヨーロッパ、韓国のオーケストラより招聘を受けている。今までにライブツィヒ放送オーケストラ、2006年にはオーケストラ・アンサンブル金沢第208回定期演奏会にて、同団体の一八番ともいえるベートーヴェン「交響曲 第7番」を、さらに2007年2月には8年ぶりに九州交響楽団を指揮し、ベートーヴェン「交響曲 第6番」を好演。延原ならではの新鮮な切り口をみせ聴衆を魅了したことは記憶に新しい。

ヴァイオリン(コンサートマスター)/姜 隆光 YOONG KWANG KANG

テレマン室内管弦楽団コンサートマスター。入団当時はヴィオラを担当し楽団のソリストとしても度々活躍。2002年の韓国での演奏旅行および、2003年のドイツの演奏旅行においてG.Ph.テレマン「ヴィオラ協奏曲 Ⅰ長調」を好演。2004年の東京定期演奏会では中野振一郎とのデュオで、C.P.E.バッハ「ヴィオラとチェンバロの為のソナタ Ⅰ短調 Wq.88」を好演。また2007年4月の東京定期演奏会でもA. ヴィヴァルディ「ヴィオラ・ダモーレ協奏曲 Ⅱ長調」を好演。その後2007年11月、バロック音楽への理解と表現力の柔軟さが認められ、「コレギウム・ムジクム・テレマン」の首席ヴァイオリン奏者に抜擢され、同時に同協会のモダン楽器の団体「テレマン室内管弦楽団」でもヴァイオリン奏者を勤めることとなる。そのデビュー公演となった2007年11月の東京定期演奏会ではG.F.ヘンデル「ヴァイオリンと通奏低音の為のソナタ Ⅱ長調」やJ.S.バッハ「ヴァイオリンとチェンバロの為のソナタ 第6番」などを中野振一郎と共演。「姜のヴァイオリンは素朴で誠実な表現をする。それがかえって両作品の作風の違いを浮かび上がらせる。ヘンデルの旋律が何とも優美。」(「音楽の友」2008年1月号)という高い評価を得る。その評価を受け、2008年よりテレマン室内管弦楽団のコンサートマスターに就任。1975年大阪生まれ。1998年大阪音楽大学卒業。

ソプラノ/中村朋子 TOMOKO NAKAMURA

大阪音楽大学大学院オペラ研究室修了。畑儀文氏に師事。主にバロック音楽や宗教音楽の分野でソリストとして活躍。バッハ「マタイ受難曲」「ヨハネ受難曲」「クリスマス・オラトリオ」「Ⅰ短調ミサ」、ヘンデル「メサイア」「プロクセス受難曲」、テレマン「最後の審判」「プロクセス受難曲」、J.ハイドン「天地創造」「四季」、M.ハイドン「レクイエム」、モーツァルト「レクイエム」「Ⅰ短調ミサ」、フォーレ「レクイエム」、ベートーヴェン「第九」他多数のソロを務めている。これまでに数回渡欧し、M.V.エグモント、M.L.アルヴァレス、H.クローク、U.フィードラー各氏の元で学び、昨年9月にはパブロ・エスカンデ氏(pf)との共演によるソリサイタルを開催、好評を博す。2003年、独・ライブツィヒでのバッハ・フェスティバルにソリストとして参加。同年、丹波の森国際音楽祭「第九回シューベルトティアードたんば」のシンボルアーティストとして各地でのコンサートやTV出演等で活躍。2006年3月、中西寛作曲創作オペラ「おさん茂兵衛丹波歌暦」に主演するなど、華やかな容姿と歌唱力で多彩な活動を行っている。平成12年度大阪文化祭奨励賞受賞。現在、日本テレマン協会会員。

アルト/渡邊由美子 WATANABE YUMIKO

大阪音楽大学卒業。同大学院歌曲専攻修了。教会音楽、カンタータ、オラトリオなどに17～18世紀の声楽曲(アルトとカウンターテナー)を専門とし、その美声と演奏解釈には定評がある。そのスマートなステージには人気があり各方面より客演依頼も多く、積極的な演奏活動を展開している。これまでもJ.S.バッハ「クリスマス・オラトリオ」「マタイ受難曲」「マニフィカート」「Ⅰ短調ミサ」「復活祭オラトリオ」「教会カンタータ」、G.F.ヘンデルの「メサイア」「ソロモン」「ヘラクレス」「陽気の人、ふさぎの人、温和の人」「デボラ」「アタライア」での主役をはじめとし、G.B.ペルコレージ「スターバト・マーテル」、W.A.モーツァルト「レクイエム」、L.V.ベートーヴェン「第九」「荘厳ミサ曲」などのソリストとして多くのレパートリーを有している。彼女のこうした活躍により、一見地味と思われがちな「アルト」のイメージが美しく一新されたといってもよいだろう。また1997年11月のアルトサイタルは大阪文化祭賞の本賞に輝いている。現在テレマン室内合唱団・バロック・コア・テレマンのソリスト。関西女子短期大学教授。

テノール/畑 儀文 YOSHIFUMI HATA

兵庫県篠山市生まれ。大阪音楽大学大学院修了。同年、小林道夫の伴奏による初リサイタルを行う。以後ソリストとして、ペーター・ダム(ホルン)との共演、イエルク・デームス(ピアノ)との数多くのリサイタル等大きな成果を収めた。91年、オランダ アムステルダムにおいてマックス・ファン・エグモントのもとで研鑽を積み、以後オランダ各地で毎年受難週にはエヴァンゲリストとして招かれ、ドイツ、オーストリア等ヨーロッパ各地におけるリサイタルでも大きな反響を呼んでいる。93～99年にかけてシューベルト歌曲全曲演奏を成し遂げ、国内外で話題を集めた。99年9月からは新たなシリーズ「シューベルトティアード」を展開中。近年日本コロムビアからCDデビューし、「日本の歌」「シクラメンのかほり～新しい日本の歌」、シューベルト歌曲集「美しき水車小屋の娘」などを次々とリリースし、その天性の歌声はジャンルを問わず心に響く感動を呼び、注目を集めている。「大阪文化祭本賞」「咲くやこの花賞」「大阪府民劇場奨励賞」「坂井時忠音楽賞」「兵庫県芸術奨励賞」等多数の賞を受賞。現在、日本テレマン協会ソリスト、バロック・コア・テレマン(B.C.T)ディレクター。シューベルトティアード・ジャパン代表。丹波の森国際音楽祭シューベルトティアードたんば総合プロデューサー。武庫川女子大学音楽学部教授。平成19年度「兵庫県文化賞」受賞。

バス/篠部 信宏 NOBUHIRO SHINOBE

大阪芸術大学芸術学部音楽学科卒業。同大学院修了。卒業時に学長賞受賞。第1回大阪国際音楽コンクール声楽部門第3位受賞。在学中「フィガロの結婚」フィガロ役、「魔笛」弁者およびパパゲーノ役、大学院修了後、関西二期会「ボッペアの戴冠」リットーレ役、大阪芸大オペラ「魔笛」ザラストロ役客演などオペラ作品に出演する一方、オラトリオを得意分野とし、2005年より毎年渡欧しオランダ・アムステルダムにてバロックバリトン、M.V.エグモント氏のもとで研鑽を積む。これまでに日本テレマン協会定期、京都・バッハゾリスステンコンサート、アンサンブル金沢クリスマスコンサート等で、バッハ「ヨハネ受難曲」「Ⅰ短調ミサ」「クリスマスオラトリオ」「教会カンタータ」、ヘンデル「メサイア」「アレキサンダーの饗宴」、モーツァルト、デュリュフレ、M.ハイドンの各「レクイエム」、ハイドン「四季」「天地創造」「ハルモニ・ミサ」、シューベル

ト「スターバト・マーテル」他多数のバスソロ、ベートーヴェン「第九」のバスソロを務める。2007年6月2日(土)イシハラホールにてピアノ：小林道夫氏を迎えソロリサイタルを行い、好評を博す。櫻井直樹、三原 剛、松本美和子、M.V.エグモント各氏に師事。現在、シノベムジクアカデミー代表、関西二期会準会員、京都バッハソリスト連所属、テレマン室内合唱団のソリスト。

フォルテピアノ/高田 泰治 TAIJI TAKATA

大阪音楽大学音楽学部器楽科ピアノ専攻卒業。同大学院ピアノ・ソロ研究室修了。在学中より日本テレマン協会のアーティストと協演も多く、中でも99年「延原オーボエリサイタル」における伴奏は好評を博した。また学内の「マイスターコンサート」に出演。オペラハウス管弦楽団とともにシューマンのピアノ協奏曲を好演。2002年よりチェンバロを中野振一郎に師事。チェンバロ奏法を基調にしたピアノ奏法をもとに、1800年のサロン音楽を中心に活動する事を決めた。2002年10月にはチェロ奏者上塚憲一「ベートーヴェン：チェロソナタ全曲演奏」において共演。「このように美しいフォルテピアノの音は耳にした事がない」と絶賛される程、フォルテピアノ奏者としてもその魅力を遺憾なく発揮した。2003年4月「延原武春オーボエリサイタル」にて共演。9月23日神戸新聞松方ホール、年10月にもいづみホール(大阪)にてチェンバロ、フォルテピアノ、ピアノの3つの鍵盤楽器を引き分けるという日本初の公演を行い、注目を集める。今年2月には東京・大阪にてリサイタルを行い、好評を博す。ピアノを永井譲、小森谷泉、川岸勝子、清水淳彦、中島和彦の各氏に、室内楽と18世紀音楽語法を延原武春氏に師事。定期的にドイツへ赴き、フォルテピアノをミュンヘン音楽大学のクリスティーネ・ショルンスハイム氏に師事。

管弦楽/テレマン室内管弦楽団 TELEMANN CHAMBER ORCHESTRA

1963年主宰者・延原武春により創設された室内楽の総合団体。拠点を関西に置き、バロック音楽の普及・啓蒙に優れた功績を重ね、現在では国内外を問わずその活動の場を広げている。テレマン作曲『マタイ受難曲』、『ヨハネ受難曲』等数々の本邦初演をはじめ、そのレパートリーの豊富さは他の追随を許していない。またその演奏は海外でも絶賛され、これまでにドイツ・フランス・イギリス・アメリカ・韓国・台湾等で好評を得ている。その他内外のアーティストとの共演や10枚に及ぶレコード・CDの出版も彼らの積極的な活動を物語っているといえる。なかでも86年の「第17回サントリー音楽賞」の受賞は、関西に芽生えたこの団体の国内に於ける評価を決定的なものにした。1990年6月に招聘したバロック・ヴァイオリンのサイモン・スタンディジ氏をミュージック・アドバイザーとして迎え、テレマン室内管弦楽団はバロック楽器による演奏を始める。このことにより、モダン楽器とバロック楽器のそれぞれを併用しうる日本初の演奏団体となった。

合唱/テレマン室内合唱団 TELEMANN CHAMBER CHORUS

1963年のテレマン協会の創立に遅れること6年、テレマン室内管弦楽団の後を追うこと5年、1968年に延原武春が創設した合唱団。主にテレマン室内管弦楽団とともに演奏活動を続けており、1985年には「J.S.バッハ生誕300年記念国祭音楽祭」に、日本から唯一招待され参加し現地新聞等やその外電も含め当時大きな評判となる。ホームグラウンドとも言うべきカトリック夙川教会に於ける「教会音楽シリーズ」は、既に152回を数え、最も大きな活躍の場となっている。これまでに、ヘンデルの10種類の違ったバージョンを年一回のサイクルで連続的に公演した「メサイア10年連続公演シリーズ」、「ヘンデル本邦初演オラトリオシリーズ」、或いは、幻のテレマン作受難曲集の公演「テレマンプロジェクト」、また「延原武春の受難曲シリーズ」を開催するなど、数多くの挑戦的な試みに取り組み、多くの注目と称賛の声を集めている。